

ピースボートおりづるプロジェクト

おりづる全国証言会 #4 「子どもたちのみらいへのリレー」

開催日：2019年2月2日（土）

開催場所：maAma サロン

対象：スタッフ含むメンバー29名（内中学生1名、教育関係者など）

証言者：坂牧幸子さん

証言会の内容

- ピースボートのプロジェクト活動の説明（10分）
- 坂牧さんご出演のドキュメンタリー番組上映『ビンの中のお父さん』（55分）
- 坂牧さんとの対談（20分）
- ・ 会場のみなさんからの質問（5分）
- お茶会（90分）

2019年2月2日（土）、三重県伊勢市にある maAma サロンにて、子ども未来クラブ伊勢、恩送り三重の会 WHAT A PARADISE の後援を頂き、4回目となるおりづる全国証言会を行いました。これは、クラウドファンディングの際に「あなたの街で証言会を開催します！」のプランに寄付をしてくださったニューヨーク在住の方が、ご自身の出身地で開催したいということで実現したものです。証言者は三重県原爆被災者の会（三友会）の事務局長、坂牧幸子さん。坂牧さんは1歳の頃に長崎で被爆をされました。ピースボートからは司会として堀場万生と記録として村上佑理が参加しました。

今回の証言会の開催場所となった maAma サロンは、元養護教員の伊藤佐知子さんが、誰もが甘えられるようなアットホームな居場所をと、こどもたちの明るい未来を願ってつくった場所です。食事を楽しんだりといったコミュニティスペースとしての役割に加えて、学校では教えない社会の出来事について伝える場所にもしたいという思いから生まれました。多方面の方をゲストとして呼び多種多様なイベントを開催されているそうです。木の温もりのする素敵な場所でした。

証言会では、まずピースボートスタッフの堀場がピースボートの説明、また行っているプロジェクト活動の説明を行いました。その後、坂牧さんご出演のドキュメンタリー番組『ビンの中のお父さん』（中京テレビ制作・2017年）を上映しました。広島と長崎には原爆投下後にアメリカが"被爆者の健康調査"を目的につくった ABCC（原爆傷害調査委員会の略称、現在は放射線影響研究所）という調査機関があります。このドキュメンタリーは、ABCC に亡くなった父親を解剖された坂牧さんを追ったものです。この過程で、被爆者調査が現在の核時代に密接に繋がる被爆者研究であった実態が見えてきます。ABCC では調査を行うだけで治療はされなかったといわれています。被爆者の治療のためになると、言われるがままにお父さんの遺体を ABCC に渡してしまった坂牧さんは、その時の自分の決断を責め続けているとおっしゃっていました。ドキュメンタリーの中では、ABCC の初期目的が被爆者の方の治療ではなく軍のためであったことも明かされません。核開発のデータ蓄積のためだったそうです。坂牧さんはとても残念だとおっしゃっていました。そのような中で長崎大学に今も坂牧さんのお父さんの臓器が保管されていることが分かりました。今でも、今後医学が進歩する中で更に役立つ可能性があるということで臓器の保管が続けられているそうです。坂牧さんは長崎の原爆の日にお父さんに会う事に決め、長崎大学を訪れ、臓器と対面します。ドキュメンタリーは「お父さん、さようなら、またね」といって坂牧さんがその場を後にするシーンで終わります。

ドキュメンタリー番組終了後は坂牧さんと司会の堀場による対談形式の会を20分ほど行いました。原爆が

落とされた当時の様子については、原爆投下の瞬間にお母さんの腕の中に抱かれたまま2～3メートル吹き飛ばされたことを話してくださいました。放射能の影響で髪の毛が抜け火傷もひどかったけれど、薬も十分になく、お医者様もいない中で苦勞したそうです。お父さんは原爆による病気に苦しみ、またお母さんも亡くなり、原爆のために家族がばらばらになるという経験をされた坂牧さん。今後こんな不幸な思いをしてしまう人が出てはいけない。そのためにも戦争への反対、核兵器の廃絶を訴えていかないといけないと思うようになったそうです。当時の状況を知る方が証言者として少なくなっていることもあり、証言活動を行うようになったそうです。今回のテーマにもなっている子どもたちの未来のために伝えたいことについても質問しました。坂牧さんが伝えたいのは命の尊さだそうです。戦闘ゲームの普及からかゲームの中のように簡単に人が生き返ると思ってしまう子どももいますが、実際はそんなことはありません。一度鉄砲で撃たれたら二度と生き返らないということは小学校や中学校に講演に行くと伝えるようにしているそうです。8月6日と8月9日の原爆の日を認識していない子どもたちも増えています。坂牧さんはそのような子どもたちに対して、「光と音ってどっちが速いか分かるー？」と問いかけ、「光って音が鳴るからピカドンって言うんだよー。8月6日と8月9日はね、平和を願う日なんだよ。覚えておいてねー。」と伝えていて仰っていました。対談後のお茶会、交流会では、今後核兵器廃絶に向けてどのように取り組んでいくべきか、そしてどのように伝えていくべきか、平和教育のあり方について参加者も交えてたくさん意見が交わされました。今を生きるわたしたちが過去の歴史をきちんと学び、“過ちを繰り返さない”ために、今後の平和な世界を実現していく為の選択と行動をしていきたい。と強く思いました。



後援団体古民家スペース和み庵・三浦知子さんの感想

ニューヨークからバトンを受け取り、三重県伊勢市の maAma サロンにて、長崎原爆を体験された坂牧幸子さんをお迎えした。戦争、そして原爆によって、仲良く幸せに暮らしていた普通の人々の暮らしが一瞬にして奪われてしまったこと。戦争が終わってからでもなお、今日まで続くたくさんの試練、葛藤。その中を生き抜いてきたからこそ、心に響く一言一言。死んでしまったら二度と生き返ることはない。原爆も戦争もない、平和な世界を。そう心底願われ、生きた言葉を伝え続ける坂牧さんの静かな決意と佇まいに心を打たれた。今を生きる私たちの選択と行動によって、子供たちの未来が大きく変わる。日本が全面降伏してから74年。私たちはこれからどんな道を選び歩いていくのか。堀場万生さん、村上佑理さんは、ピースボートに乗って世界を巡った後、職員として働いていると言う。人の絆を結んでいくこと、バトンを受け取って次の世代へと繋いでいくこと、夢の先にある志とは何か。眼をきらきらと輝かせながら想いを語る二人は20代前半の若手ホープ。彼女たちの姿に日本の未来の光をみた。嬉しさに魂が震える。伊藤知佐子先生を核とした、maAma サロンの慈愛に満ちた時空間。今までもこれからも、多くの魂たちが集い、響きあい、いのちを織り成していく。ひとりひとりの大切ないのちの物語を次へと繋いでいくこと。それが真の平和への近道なのかもしれないと感じた。

WHAT A PARADISE | 古民家スペース和み庵 | 杜人 三浦知子